

日本病理学会学術集会の改革案に関するアンケート調査

病理学会理事長 森 茂郎

病理学会学術委員長 岡田保典

「学術集会の意義と目的」:

日本病理学会は、「病理学に関する学理及びその応用についての研究の振興とその普及を図り、もって学術の発展と人類の福祉に寄与する」ことを目的としており、重要な事業として学術集会を開催しております。

学術集会の目的と意義については、「病理学を専攻する人々が研究発表と意見交換を通して持続的な後継者の育成をするとともに、病理学に関する最新情報の収集を行う」ことにあると考えられます。より具体的には、(1) 病理学専攻者の学術成果の発表の場を保証し、発表を通して若手研究者・病理医の育成を行う、(2) 蓄積された完成度の高い研究成果を聞くとともに、中堅クラスの発表を聞き育成・激励する、(3) 診断病理に関する情報の収集とともに、講習会等を通じて病理診断の精度の維持・向上に努める、ことなどがあげられます。

「改革案提案の背景と経緯」:

このような学術集会の目的達成のために、日本病理学会では春期と秋期の学術集会を開催する2学術集会制を導入してきました。このシステムは特色のあるよく考えられた方法であり、これまで一定の成果をあげてきました。しかし、導入から約50年が経過し、この間の学問・技術の進歩、業務の拡大と専門化、支部活動の活性化や学会・研究会の増加などにより、学会員の学術集会に求めるものも徐々に変化し、いくつかの問題が顕在化してきました。たとえば、秋期学術集会への参加人数は春期学術集会の1/2~1/4と少ないこと、春期学術集会については診断講習会・臓器別講習会と一般講演が並列されており研究発表と講習会の一方にしか参加できなくなっていること、シンポジウム・ワークショップの乱立・多会場化、などがあげられます。

これらを改善するために、学術委員会と研究推進委員会では合同委員会を開催し、「春・秋期学術集会のあり方」に関して、6回にわたる審議を行ってきました。その結果、春期、秋期学術集会に関して下記の3項目からなる改革案を提言し、本年4月に開催された第94回日本病理学会時の理事会で審議後、学術評議員会と総会において本案を学会員に提示してきました。本改革案は、「学術研究活動」と「診断病理の講習・トレーニング」が学術集会において乖離することなく運営すべきとの考えに基づいております。

「改革案」:

(1)春期学術集会:「診断講習会・臓器別講習会」の多くを早朝・夕方および秋期学術集会に移動し、一般発表演題との重なりを少なくする。また、宿題報告は1会場で行い plenary を維持する。

(2)秋期学術集会:「A 演説 (7-8 件)」と「診断シリーズ (2 件)」は1会場で行い plenary を維持するが、「B 演説」や「シンポジウム」は複数会場で行い、「診断講習会・臓器別講習会」や「公募演題」を適宜導入することで世話人の自由度を広げる。また、秋期学術集会の参加単位数を10点から20点に上げる。IAP、病理技術講習会、スライドセミナー、診断講習会、教育講演などを効果的に連動させる。また、「B 演説」のあり方についてはさらに検討する。

(3)学術集会プログラム調整委員会:春・秋学術集会の統一性を保つため、コアになる「シンポジウム・ワークショップ」「診断講習会」や学術集会に連動する「講習会」「講演」「その他のイベント」などの設定に助言を与える学術集会プログラム調整委員会を立ち上げ、これらの乱立をさけることで同時進行する会場数を減らす。

「アンケート調査」のお願い:

今回、病理学会支部会において、学会員の皆様から広くご意見を伺うことにより、本改革案をより具体化したいと考えております。上記の改革案をお読みの上、別紙アンケート用紙にご意見をいただきたくお願い申し上げます。なお、本改革案については病理学会のホームページ上でも公開し、本年8月末まで学会員の皆様のご意見を受け付けております。

アンケート回答用紙

1. (1) 春期学術集会に関する提案について、ご意見をお書きください。

2. (2) 秋期学術集会に関する提案について、ご意見をお書きください。

3. (3) 学術集会プログラム調整委員会設立に関する提案についてご意見をお書きください。

4. その他、全体を通して意見がありましたらご自由にお書きください。

学会員 氏名 _____ (差し支えなければご記入ください。)